

## 立花 隆 『天皇と東大』

(文藝春秋, 2005年)

中山 弘 正

文春文庫4冊(各500頁余)が、2012年12月から2013年2月にかけて出ており、評者はそれで読んだ。もともとは『文藝春秋』1998年～2000年に連載され、2005年に上下2巻本で出版されたもの。Ⅰ～Ⅳとページ数で示す。

Ⅰの帯に「日本近現代史の最大の役者は天皇であり、その中心舞台は東大だった」とある。こうした独特の「視座から明治、大正、昭和を読み直す」ものだという。Ⅰだけでも18章から成り、第Ⅳ巻の最後は第66章。第1章「東大は勝海舟が作った」から第18章「大逆事件と森戸辰男」までがⅠ。第19章「大正デモクラシーの旗手・吉野作造」から第35章「日本中を右傾化させた5・15事件と神兵隊事件」がⅡ。第36章「滝川事件 鳩山一郎と美濃部達吉」から第53章「『太った豚』による矢内原忠雄追放劇」がⅢ。第54章「経済学部教授を獄中に葬ったスパイH」から第66章「天皇に達した東大七教授の終戦工作」がⅣである。確かに今掲げた八つの章名だけから見ても、Ⅰの帯の「役者は天皇」「舞台は東大」という言い方も、一理あるかなと思わされる。

各章のはじめに、その章に登場する主な人物の写真が数枚紹介されているのも興味深い。

Ⅰに「文庫版のためのはしがき」がある。「訳がわからないことが起

こりつづけたあの戦争の時代を理解する鍵は、天皇にある。あの時代、日本人は、ほとんどの人が天皇狂いしていたのである。ミッションスクールの先生で、キリスト教徒を標榜していた私の家でも、後年……私の母は、『あの頃、お父さんちょっとおかしかった。右翼になっていた』と述懐したことがある。日本社会全体が、どのように天皇狂いするにいたったかが、この本の主題の1つである。』はしがきで、「東大は明治新政府が日本を近代国家として一刻も早くたちいくようにするために、西洋文明の摂取と人材育成のために作った大学だから、創成期は、この学校の歴史がそのまま近代日本の歴史に重なる。（「帝国」の時代）東大は「帝国大学」を名乗り、帝国日本の人材育成の中心的な役割を担ってきた。……日本の高級官僚は、行政官も外交官も東大法学部がほとんど一手に供給してきたのである。……従ってある時代の日本の失敗も成功も、その前後の時期に東大が供給してきた人材による国家運営の失敗であり成功だったといえる。」著者は、日本は大いなる過ちを国運営で起したが、その原型はほとんどここにあると見ている。

「現代日本は、大日本帝国の死の上に築かれた国家である。……死体は分解して土に返ってしまったようで、実は、その相当部分が現代日本の肉体の中に養分として再吸収され」ている、とする。

第1章は、伊藤博文、勝海舟らの写真とともに始まる。明治の近代日本国家の基礎を成したのは教育で「全国的な教育水準のレベルアップ」で殖産興業、富国強兵がなされた。

小見出し等も追いかけてみれば、「外国人教師に給与三億円」、「『国体』という言葉の暴力性」、「日本の大学の歪んだ性格」、「大学の成績が俸給に直結」、「日本敗戦の元凶」、「明治が天皇の大学教育への不満」、天皇「神格化」への道、「不敬罪に問われた人びと」、「日露開戦を煽った7博士」、「侵略シナイガ非常ナ不道德」、「満州を永久占領せよ」、「無政府状態におちいる東京」、「美濃部達吉の政府批判」、「帝国大学は政府

の奴隷か」、「経済的独立なくして学の独立なし」、「山川は幸徳に似たる危険人物」、「京大教授陣の“俗吏”総長追放」、「沢柳・京大総長の7教授クビ切り事件」、「法科教授陣『学問の独立を守れ』」、「『天皇大権論』対『学問の自由論』」、「法科閉鎖の危機に総長ついに屈服」——ともかくこれで教授会の同意なしには、文部当局（総長）が教授の任免を勝手に行うことはないという原則が確立され、大学自治の基礎（人事権の確立）がここに築かれることになった。京大も東大も、総長の公選の厳しい闘いを行ったのである。

私自身が生まれた昭和13年（1938年）には、東大では大内兵衛、有沢広己、脇村義太郎が治安維持法違反容疑で逮捕されるという「教授グループ事件」があった。その前には、大森義太郎、山田盛太郎、矢内原忠雄などが大学を追われていた。東大の経済学部の「ゼミナール制度」が作られたのが、この頃のことであったことを知った。〔このあたりに出てくる大内は兵衛先生のことだが、私は、ずっと後、1959、60年度だが、その御子息の大内力先生のゼミナールに所属した〕Ⅰの最後第18章は「大逆事件と森戸辰男」。森戸氏と、高野岩三郎の写真で始まっている。東大経済学部の「あかずの間」の話は初めてだった。

Ⅱの帯には、「有傾化が進行するなか、日本は国をあげて戦争体制に突入していく」とある。吉野作造の大正デモクラシーから始まるのであるが、「天皇制とデモクラシーの調和」は、すぐに右翼団体・浪人会との対決になる。右翼の方には、上杉慎吉いて蓑田胸喜らが集まっている。元老・山県有朋は「学者亡国論」。その台頭は「東大の大学としての自殺」。ポリシェヴィズムをどう考えるかでの激動。1930年代前半は血盟団事件、5・15事件（犬養首相射殺）、永田軍務局長射殺事件、2・26事件、右翼クーデタ。それによって国家総動員、日中戦争、ノモンハン事件、太平洋戦争へとすすんでしまう。「世界でも独特の右翼思想」、「岸信介と『日の会』」、「『魔王』北一輝に魅了される」、岸は東大

新右翼のホープであった。第24章新人会きっての武闘派・田中清玄のはじめの写真は、田中の他、大宅壮一、石堂清倫。東大初の“内ゲバ”。昭和2年の花形作家・芥川龍之介の35歳自殺での「不安」は「時代のキーワードとなっていた。」学生レベルでも左派は、「新人会」「建設者同盟」「労学会」「社研」などをつくる。右派も当然いろいろ作っていたから「政治的討論から暴力闘争へ」が広がっていた。昭和5年5月には「武装メーデー事件」も起こった。

昭和3年（1928）3・15共産党大検挙（約1,500名）はⅡのひとつの山。志賀義雄・福本和夫らの写真で章が始まる。「治安維持法抵触の是非」「日本のクロンシュタット・月島」「山口（均）イズム対福本イズム」「公然と姿をあらわす非合法共産党」などで、この頃の極左の運動が詳しく述べられていく。

「河上肇はなぜ京大を去ったか」（第26章）は、河上肇、田中義一、水野錬太郎の写真とともに始まるが、「学内人事が国家的大問題に」「大学から悪思想を根絶」……と「思想検事」が置かれたり「特高」の大拡充が計られていく様子も描かれているが、「東大五月祭の起源」もこのあたりにある、というのは意外だった。「マルクス主義経済学最大のスター」は、無論、河上肇のことを指しているが（京都大）、彼について少しくわしい。「私自身も、ブルジョア社会の大学教授をしてこれ以上居座っていたいとも、考えていなかった。」等々の発言も詳しく記されている。共産党との接近、偽コミunistに騙される、と続くが、次の章も「河上肇とスパイM」で「スパイ松村に会う」「みんなバレている」「戦線脱落宣言」（ただただ自分の弱さをみとめる）と続くが、「転向の雪崩現象」も述べている。結局河上の下獄は5年に及んだ。「この時代、小菅刑務所は、左右両翼の有名被告たちがギッシリつまっていた。」という。

右翼の血盟団にも先ず1章割かれているが、じつは、Ⅱの後半は、ほ

とんど右翼研究にあてられているとあってよい。第29章昭和維新の最先端にいた帝大生・四元義隆，第30章国家改造運動のカリスマ・井上日召，第31章血盟団事件，幻の“紀元節テロ計画”，第32章共産党「赤化運動」激化と「1人1殺」，第33章血盟団を匿った二人の大物思想家，第34章権藤成卿と血盟団グループの壊滅，がそれであるが，これらの流れが「5・15」をもたらした，と把えられていて，Ⅱの最終，第35章は「日本中を右傾化させた5・15事件（犬養首相射殺）と神兵隊事件」である。その最後は「裁判長も天皇機関説を批判」であり，宇野裁判長が検事よりもさらにはっきり「斯ウ云フ言葉ハ，外国ノ言葉ノ翻訳デアル。……畏レ多クモ皇国日本ノ大御霊デアラセラレ我等日本民族ノ大御親デアラセラルル一天万乗ノ天皇様ニ対シ奉リ，……国家ノ一機関デアルナドト云フヤウナ説明ヲスルナドトハ言語道断デアル」などと述べたという。「結果的には大審院の公判法廷は団体明徴運動の思想的宣伝の場であるが如き観を呈した」のであり，「ついこの間まで，国家公認の学説であった天皇機関説は，かくの如くアツという間に弊履のごとく捨て去られてしまった」のであった。

Ⅲのサブタイトルは「特攻と玉砕」。第36章滝川事件，鳩山一郎と美濃部達吉，で始まる。「教授ら39名が辞表提出」「自由主義の最後の戦い」等と進み，第37章京大・滝川幸辰教授はなぜ狙われたが，が論じられる。「滝川はマルキシストか」大森義太郎はそれを否定し，「神の国への基督教の信仰でもあらう」とさえ言った。「治安維持法批判」がからんでいた。「狂信右翼・蓑田胸喜と滝川事件」で，著者はこの頃の実天皇制を「超国家的神聖宗教制度として機能」していたとする。「黒板に蓑田狂気と落書き」<sup>かけい</sup>さえあった。寛克彦と「神ながらの道」もこの時代を示している。第40章美濃部達吉，統師権干犯問題を撃つ，は「天皇機関説とは何か？」と始まるが，日本の臣民は天皇の臣民なり，天皇に服従するを以て其の本質たる性格と為す，とされ，「政治上の自由意志

は天皇にしかないというのである。」明治憲法前文は神道の祝詞，帝大法学部は淫祠邪教の総本山で「現日本国家社会生活の万悪の根源である」とまで言われた。私自身の生まれた昭和13年（1938年）頃には，2・26事件の被告らが「裁判長検事の団体に関する信念を問いただし，裁判長検事とも団体擁護を誓う，といった年だったという。

第42章ゾルゲ・昭和天皇・平沼騏一郎，には岡田啓介の写真も入っている。「機関説でよいではないか」と天皇はいった。それで「天皇機関説指弾は政治権力闘争」であった，とし，かえって「対ソ交渉は天皇機関説で成功」とする。2・26事件は「天皇機関説論争が招いた」ともいえ，それが「国体明徴運動に転化」し「現人神信仰が社会全体に押し広げられていった。」とされる。昭和12年の日中戦争の開始，国民精神総動員運動等と重なっていく中，「海行かば」はあらゆる集会で歌われるようになり，「国民全員に死ぬ覚悟が求められたのである。」—余談，私の国民小学校入学は1945年4月であるが，音楽の先生にあだ名が「かば」さんが居られ，皆，「海行かば」の「かば」をわざと大声出してふざけたりもしていた。—美濃部自身は比較的自由であったが，狙撃事件も起こった。「2・26事件は，青年将校たちが，天皇親政国家を作らんとして起こったクーデタである。」が無論，「反乱罪で死刑の判決」であった。「青年将校たちは，ひたすら天皇のためを思い，天皇を機関説に呪縛された立場から解放するために決起したというのに，当の天皇からは憤激を買うのみで死刑に処せられて終わったのである。昭和の歴史が生んだもっともオアラドキシカルな悲劇としかいいようがない。」あとは，「満州事件にはじまる暴走」，「二，二六事件のオアラドクス」。そして，第45章「東条が心酔した平泉澄の皇国史観」大日本は神国なり，平泉史観を後押しした国体明徴声明，と続く。人間魚雷「回天」なども平泉神宮（天皇教だった）の玉砕思想を抜きには語れない。平泉澄はⅢの第45～50章の6の章名にも登場する位であり「東条が心酔した」か

ら、「特攻と玉砕 平泉澄の戦争責任」まで、第2次大戦の終了へ向けての時期にとりわけ大きかったことを本書は指摘しているといえよう。

第50章特攻と玉砕 平泉澄<sup>きよし</sup>の戦争責任は、「家族にも一緒に死んで貰う」、「沖縄玉砕、本土決戦間近（平泉は全国各所で忠君愛国の日本精神を説いてまわっていた、「皇国護持の道」「限りなき皇運を仰ぎ奉る」「決死の学」等々）」「一億皆兵、義勇兵法が成立」（沖縄もまたほとんど全島玉砕に近い形で戦いを終えた。15才以上の全島民に防衛召集をかけて、全員が義勇隊に編成された）「天皇もあきれた決戦準備（在満州・中国の日本軍の兵力状況にもとうてい及ばなかった）」

天皇のポツダム宣言受諾の「聖断」（8月9日）のあと「念のために理由を」と彼は語った。「戦争がはじまっていらい陸海軍のしてきたことは、どうも予定と結果がたいへん違う場合が多い。いま陸海軍は本土決戦の準備をしておって、勝算も十分あると申しておるが、わたしはその点について心配している。（九十九里浜の防衛対策、新設向敵師国装備完了などいうが）実は銃剣さえ兵士に配給されていないことがわかった。このような状態で本土決戦に突入したならばどうなるか、わたしは非常に心配である。あるいは、日本民族は、みな死んでしまわなければならないことになるのではないかと思う。そうなれば、皇祖皇宗から受け継いできたこの日本という国を子孫につたえることができなくなる。日本という国を子孫につたえることができなくなる。日本という国を子孫につたえるためには、一人でも多くの国民に生き残っていらって、その人たちに将来ふたたび立上ってもらうほか道はない」、「天皇の考えと軍部の考えが完全に求離してしまっている。……昭和18年前半……ガダルカナル島玉砕……を境にして、あとは坂道↓……19年に入るとマリアナ、サイパンを失って連日の本土空襲……20年に入ると、硫黄島、沖縄を失い、米軍の本土上陸目前……というところまできていた。」文字通りの1億玉砕を軍部は「本当にそこまでやるつもりに

なっていたのである。」特攻隊の父大西龍治郎中将は、終戦の翌日、英霊に「深謝」し白刃した、というが、平泉はただ大学を「退官」し、「もとの白山神社の宮司に戻った」という。河合栄治郎、宮沢俊義などととも敗戦への矢内原忠雄についても詳しく記されている、「天皇神性」の「問題」に公然と取り組んだ例外的存在として。「太った豚」による矢内原忠雄追放劇、がⅢの最後の章。私自身の東大入学式（1957年4月）の「総長」の祝辞を私は感謝する。

Ⅳは「大日本帝国の死と再生」。大内兵衛、有沢広己らの写真と「経済学部教授を獄中に葬ったスパイH」（第54章）から始まる。あらためて、昭和初期からの「経済学部三国志、宿命の権力闘争」から論じられ、当時、文学部歴史学科の副手だった林健太郎の分析なども紹介される。「軍艦総長・平賀譲の経済学部大粛正」（第58章）、平賀は東大で造船学を学び、軍艦作りをしていた者だったので、こんな風にも呼ばれたという。「戦時経済の窮兇・土方成美 絶頂からの転落」（第59章）、「粛学の立役者、田中耕太郎の四面楚歌」（第60章）、〔田中はカトリック信者〕（第60章）「難局の経済学部長、舞出長五郎の小心姑息」（この中では舞出は「アル1人を棄てた経済学者」として登場）、「河合栄治郎の深謀」などが2章続き、第64章では東京帝大と戦後の東大の対比、“臣民の天皇に服従するは国体なり”から“主権在民の国”になったことが論じられる。学徒兵は、法経文農系で多く、工理医系では「徴兵猶予の継続」が続いていたことなども示されている。第65章「南原繁総長と昭和天皇退位論」は、複員学徒が次々ともどってきた大学の様子が語られるが、第66章「天皇に達した東大7教授の終戦工作」は、南原のイニシアで法学部が中心だったという。当然、米内光政・高木惣吉らの終戦工作も語られているが、私の父定義はこの高木少将と近い人だった『一海軍士官の回想』（毎日新聞社、1981年）。天皇の二度の「聖断」に南原たちの働きかけが「届いていた」という。補遺「東京帝国大学が敗



れた日」の中見出しには「GHQ東大接収の危機」も「敗戦予見した有沢広己の研究」などもある。

参考文献一覧は上下二段組みで、じつに60頁に及ぶ。本当に大きな大きな力作である。

正直なところ、私はこの著者の作品は何も読んでいなかった。それに題名がちょっと奇怪な感じもして当初積極的な気持ちになれなかったが、じっさいに読んでみると、なかなか読みごたえのあるものであった。出版社の帯が宣伝するほどに、「知の巨人による入魂の大作」かどうかは判らないが、「まったく新しい視座から明治、大正、昭和を読み直す〈歴史ノンフィクション〉の金字塔」という強調はあながち否定できないと感じる。

じっさいには、右にも左にも、いろいろな論客がひしめいていて、そうした論客の主張が世論を導いていくという点では、今も当時も変わらないのであろうが、「戦争」という国民全体にとってクリティカルな状況が継続するなかで、たしかに「大日本帝国」時代の碑本では、「天皇」の存在と、「東大・京大」（じっさいは京大は相当登場している）といった東西有力国立大学の諸スタッフ（集団）との関係は注目せざるを得ない出来事であったであろう。その意味では、何となくイヤラシイ本書のタイトルにも近現代の日本を把握するひとつの有力な設定かもしれない、と改めて思わされる。

ましてや、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」という。現代世界でも稀な「第9条」を憲法に持つわれわれは、本書が広く深く分析したところの旧「大日本帝国」が、「天皇と東大」の2語に集約されていたということを、本当に真剣

に受けとめ、もう一度の誤ちを絶対に犯さないことをあらためて、心に深く誓わねばならないであろう。その意味で、本書は真に真剣で真面目な大著作であると思う。

ましてや [が重なるが]、大きな大きな加害と被害の末に、ようやく「象徴」にまでその存在を低められたかの地位が、「元首」へと自民党案が出来てしまっている今日、一人でも多くの方々に本書が真剣に読まれることを、心から深く希望し期待したいと思う。

(主2013年8月15日)